

こじま あつし

小嶋 篤

(福岡県)

学位の種類

博士 (文学)

報告番号

甲第 1472 号

学位授与の日付

平成 26 年 3 月 25 日

学位授与の要件

学位規則第4条第1項該当（課程博士）

學位論文題目

九州北部と律令国家形成 一太宰府成立前後の鉄生産と兵器一

論文審査委員 (主 査)

福岡大学

教授

武末 純一

(副 查)

福岡大学

教授

森 茂暁

福岡大学

教授

松塚 俊三

福岡大学

教授

桃崎 祐輔

元福岡大学

教授

小田 富士雄

論文要旨

本研究では九州北部、とくに大宰府の直轄支配下にあった筑前国（福岡県西部）を主要な対象地域とし、律令国家形成期の地域社会の実像を探るのを目的とする。研究対象となる『日本版律令国家』は、「ユーラシア大陸東端の島々で形成された古墳社会」を基礎に中国王朝の隋・唐の政治体制を導入したものである。このため、古墳社会と律令社会の断絶面と連続面の両面を把握すれば、その実像により近づけると考える。また、本研究では政治・生産・自然環境と密接な関係にある「鉄生産」やその軍事的利用となる「兵器」に焦点を当て、その推移を研究の軸に据えた。

「第Ⅰ部・九州州北部の鉄生産」では、燃料となる木炭確保のための製炭工程、始発原料となる鉱石を集める採鉱工程、木炭の燃焼により鉱石から鉄を抽出する製錬工程を個別に検討し、鉄生産の総体を把握した。その検討結果に基づいて、律令国家形成期前後に操業された工房間の技術保有状況を相互に検証し、九州北部の鉄生産の実態を明らかにした。律令国家形成期には、製鉄技術と製炭技術（築窯製炭技術・非築窯製炭技術）を組み合わせた均質的な技術移入が図られるが、その後の展開は地域独自の動きを見せる。本研究では、とくに地域における山林の利用形態により、地方毎に製炭遺構の遺構組成と比率が大きく変化する様相を見出した。九州北部の山麓域の燃料消費では、建築部材等にも利用できる幹材の消費を避ける傾向にあり、大型の築窯製炭遺構ではなく、小型の非築窯製炭遺構が卓越する状況にある。また、福岡平野周辺では、古墳時代に形成された墓域内に自生した二次林を燃料消費に積極的に利用しており、結果的に古墳時代的景観が長期間維持された。

「第Ⅱ部・鉄生産と信仰」では、古墳時代中期～後期にかけて、西日本を中心に見られる鉄滓出土古墳を取り上げた。鉄・鉄器生産での副次的生成物である鉄滓を用いた習俗を検討することで、第Ⅰ部の研究成果の深下を図った。九州北部での鉄滓副葬・供献習俗は、倭王権による鉄の貢納集団（部民）を各領域で個別に設定した結果、特定領域に集中する分布域を形成したと考えた。次に、鉄滓出土古墳以後の信仰として金屋子神信仰に着目し、より多くの歴史資料から、前近代社会の鉄生産の実像に迫った。また、鉄生産の舞台となる山林について、山林内に形成された山岳霊場に注目することで、律令的土地支配の変遷とともに山林の領域的認識が高まる様相を考古資料から見出した。

「第Ⅲ部・鉄の掌握者」では、九州北部の首長層と倭王権の動向を時間軸に沿って、各時代の様相を検討した。古墳時代中期では、渡来系文化が九州北部でどのような過程を経て、普及したのかを首長層・在来集団・渡来人集団に着目して検討を加え、地域首長を核とした共同体の形成による渡来系文化の早期の浸透を考古資料から説明した。加えて、渡来系技術普及後の様相を、九州北部の在来集団が保有する鉄器の組成から検討した。当該期に見られる倭王権による鉄流通の掌握と、地域首長が独自に保有する鉄器製作能力により、多量の広域共有型式の鉄器と少量の地域独自型式の鉄器の共存状況を生み出した。

古墳時代後期では、玄界灘沿岸の豪族である「胸肩君」に焦点を当て、当該期の首長層の動向を把握した。胸肩君が本拠地とする宗像郡は、屯倉や部民の設置記事が少なく「非屯倉設置地域」と相対的に評価できる。これに対し、福岡平野周辺は那津宮家を中心に、部民の設置記事も多い

「屯倉設置地域」と識別でき、両地域の対比が注目できる。また、畿内型墓制をはじめとする非在地墓制の検討から、九州内外からの人の移動を考古資料から検討した。宗像郡では胸肩君を核とする古墳墓制が求心力を高め、玄界灘沿岸の東西に広がる分布領域を形成した。その一方で、隣接地域となる福岡平野周辺には、多系統の古墳墓制が同一領域に混在する。このような地域の多様性を前提として、九州北部は律令国家形成期を迎えた。

次に飛鳥・奈良時代の様相を文献史学の研究成果を整理しつつ、考古学的知見をふまえ、大宰府の成立過程を軸に大宰府管内での支配構造を説明した。そして、大宰府管内の郡司層の動向についても、胸肩君の後裔氏族である「宗形朝臣」に焦点を当てた。これらの文献史学の研究成果と考古学の研究成果を統合することで、研究のさらなる深化を図った。

「第Ⅳ部・鉄と兵器」では、大宰府史跡蔵司地区出土被熱遺物を基点に、大宰府管轄下の兵器の実態解明を試みた。その実態解明は、①資料観察、②数量と組成の把握、③編年的位置づけ、④層位的検証という過程を経る。そして、大宰府の兵器でも、とくに輸送記事の多い「弓」に着目して、大宰府管轄下の兵器の性格をさらに追求した。また、大宰府政庁跡で出土した小札甲の資料的性格を検討することで、古代における兵器管理の実態を明らかにする。次に、これらの資料と対比可能な事例として小郡官衙遺跡出土鉄鏃群に着目した。

これらの検討をふまえ、兵器の様式・製作・確保・管理の視点で研究成果を整理した結果、大宰府管轄下の兵器の大部分は、古墳時代後期の武装様式を踏襲する状況を見出した。とくに消耗品的性格が高い鉄鏃の数量的確保は、筑紫大宰体制下で実施されたと考えられ、当該期に確保された兵器が大宰府成立期の軍備の中核となっていたと考える。

最後に第Ⅰ～Ⅳ部の検討結果を、鉄生産の推移を軸に整理し、律令国家形成期における地域社会の実像を探った。

審査の結果の要旨

1. 本論文の特色

- (1)本論文はこれまでの考古学研究で、ともすればそれぞれの時代で完結し切り離されてきた古墳時代研究と古代研究を統合して、律令国家体制が形成されていく様相を、北部九州なかでも筑前国の考古学的な事象から地域史として描き出そうとした点が、第一の特色である。
- (2)これまで、こうした研究は主に墓制の検討を主体に進められてきた。本論文でもそうした墓制の分析もちろん取り扱うが、それよりも主に鉄や須恵器・埴輪などの手工業に関わる考古学資料から生産活動を解明して課題に接近する点が、第二の特色である。
- (3)古墳時代の地域間関係では、釘付木棺を分析して近畿の倭王権から生産集団の首長層にそれらが導入されたことを明らかにしたように、近畿と北部九州地域の関係はもちろん重視されるが、近畿一辺倒ではない。学部生時代から追究してきた九州の埴輪の地域型とともに石室の類型区分、特殊な形態の高坏の取り扱い方まで含めた分布論によって、北部九州内の地域と地域の間関係を明らかにした点が第三の特色である。地域の中での渡来人の位置づけも、すでに指摘されていたことではあるが、一律に渡来人集団とするのではなく、精密な遺構・遺物の分析によって、在来人と入り混じり、階層的に下位に位置したことを改めて論証している。
- (4)古墳時代から古代へのつながりでは鉄・須恵器の生産体制のほか、甲冑や鉄製の武器の検討を通じて大宰府の武装体系を解明し、北部九州では古墳時代の武装体系が古代にも引き継がれたと指摘する点が第四の特色である。

こうした分析の結果、古墳時代の倭王権による北部九州での部民設置が考古学の資料を通して浮かび上がり、あわせて生産技術移入段階での均一性とその後の地域独自の展開が明らかになった。また、宗像地域と福岡地域の分析から「非屯倉設置地域」と「屯倉設置地域」という概念を引き出した。そして、こうした地域の多様性を踏まえて律令国家体制が形成されたことを明らかにした。

2. 評価

申請者は、自身が行った考古学的経験をよく消化し、明確に研究課題を設定して、それを解決する方法論を身につけ、論理的に述べる技術を獲得している。本論文ではなによりも、これまでほとんど築窯製炭遺構しか取り上げられなかった製炭技術を、非築窯製炭遺構まで含めて体系的かつ全国的に網羅して検討を加え分析した点に、大きな独創性が認められる。それとともに、鉄滓出土古墳を綿密に分析して類型化し、福岡地域での分布の偏り、さらには古墳群内部での分布の偏りを導き出し、須恵器工と製鉄工のすみ分けを明らかにした部分は、本論文の白眉である。また、鉄滓出土古墳の調査方法の提示にまで至った点は、方法論的思考もものになっていることを具体的に示す。学部生時代から研究してきた九州の埴輪の分析は精密で、分布論的分析も安定している。

ただし、「非屯倉設置地域」か否かはまだ検討すべきで、民俗資料の使い方も未習熟である。5世紀の渡来人や王権の評価も、朝鮮半島の政治情勢の変化を抜きには理解できない。こうした点は、本論文がまだ成長中で、今後伸びる余地が多くあることを示しており、課程博士論文としてふさわしい。

公聴会は2014年1月30日に実施し、討議は活発で、申請者はそれに明確に回答していた。